

O-1 咀嚼チェックガムにおける各種機能検査のパイロットリサーチとしてのアンケート

Questionnaire as a pilot study of various functional laboratory tests in color-changeable chewing gum.

○秋知 明, 西山和彦, 荻原 真, 新井真澄, 谷川淳一, 上松隆司, 中村雅之, 奥寺 元

○AKICHI A, NISHIYAMA K, OGIHARA M, ARAI M, TANIGAWA J, UEMATSU T, NAKAMURA M, OKUDERA H

一般社団法人東京形成歯科研究会

Tokyo Plastic Dental Society

I 目的: 咀嚼は口腔機能として栄養消化機関の一部として重要であるだけでなく、認知機能向上・身体維持のためにも重要である。またオーラルフレイルに大きく関与している。種々の原因で歯を失い、その後、義歯、ブリッジ、口腔インプラントにより機能回復されたそれぞれの咀嚼効率を測定するのに篩分法、グルコセンサーなど、さまざまな方法がある。今回、より簡便な咀嚼チェックガムを47名の被検者に使用させアンケートを取ることで有用性が感じられたので報告する。

II 材料および方法: パイロットリサーチとしてアンケートを(一社)東京形成歯科研究会会員を対象に47名から行い、その内容は、

1. 咀嚼チェックガムの知名度 2. 希望 3. 試してみてもよい点および悪い点 4. 咀嚼評価方法の改善点 5. オーラルフレイルの予防の大切さを説明しているかとその方法に回答 6. 説明している内容を取りまとめ、それらの結果を分析し表にした。

III 結果: 1. 咀嚼チェック認知度は34%(16名)と低かった。2. 活用していきたいと思うものが60%(28名)で希望者があった。3. よい面: おいしく・食べやすい, 気軽に実施できる, 視覚的に判定できるとの回答があった。

4. 改善点としては、診断基準値の設定, 視覚では判断が難しいため機器で測定できればいいとの意見があった。

5. 半数近くの者がオーラルフレイルの予防の大切さを説明していた。47%(22名)

6. 口腔機能低下症の問題点を認識しており、その予防に咀嚼が大切と認識されていた

IV 考察及び結論: 本調査結果から、咀嚼チェックガムがインプラント後の咀嚼の機能検査において視覚的に判定から有用性が感じられた。すなわち、またチューウイングガムは手軽さとその性質から咀嚼嚥下機能・全身的機能向上として臨床応用に可能と思われる。今後、ガム咀嚼療法における咀嚼嚥下機能等の身体機能が助長としての可能性、咀嚼試験・咬合力・血流変化・唾液流出量および顎咬合筋の筋硬度変化を合わせて、インプラント使用の生理的効果のエビデンスを追及していきたい。

O-2 下顎再建後に広範囲顎骨支持型補綴を適応した症例の口腔機能と口腔関連 QOL 評価

Evaluation of oral function and oral health-related quality of life in a case of implant-supported maxillofacial prostheses for wide edentulous area after mandibular reconstruction

○柳井智恵, 小倉 晋, 山田麻衣子, 石井通勇, 是澤和人, 井坂栄作, 近澤俊郎, 高橋かれん

○YANAI C, OGURA S, YAMADA M, ISHII M, KORESAWA K, ISAKA E, CHIKAZAWA T, TAKAHASHI K

日本歯科大学附属病院口腔インプラント診療科

Division of Oral Implantology, Nippon Dental University Hospital

I 目的: 2012年の歯科診療報酬改訂において、広範囲顎骨支持型装置および広範囲顎骨支持型補綴等が保険導入され、腫瘍、顎骨骨髄炎、外傷等により広範囲な顎骨欠損若しくは歯槽骨欠損症例、骨移植等の再建症例など用いられ、口腔機能の回復に応用されている。広範囲顎骨支持型補綴は顎欠損部の器質的・機能的回復だけではなく、患者のQOL向上をもたらすことが期待されている。今回、下顎再建後に広範囲顎骨支持装置および補綴を適用した症例に対し口腔機能と口腔関連QOL評価を行い、その有用性を検討した。

II 症例の概要: 患者は58歳男性。2012年10月、下顎左側歯肉の膨隆を主訴に当院を紹介受診した。下顎左側角化嚢胞性歯肉腫瘍の診断のもと、下顎区域切除、遊離腸骨移植および金属プレートによる顎骨再建を行うこととなった。また術後の口腔機能回復においては広範囲顎骨支持型装置および補綴装置を適用することで治療計画を立案した。同年12月に全身麻酔のもとに下顎区域切除、遊離腸骨移植および金属プレートによる顎骨再建手術が施行された。翌年に広範囲顎骨支持型装置の埋入手術を予定したが、患者は海外出張するため手術を延期し顎義歯を装着した。2018年9月にインプラント治療を再開し、同年11月に全身麻酔の

と、口内法にて金属プレート除去および広範囲顎骨支持型装置の埋入手術を施行した。3か月後に二次手術を行い、プロビジョナルレストレーション装着後、2019年11月に最終上部構造を装着した。口腔機能検査では佐藤らの咀嚼機能評価、感圧フィルムによる咬合力検査、グミゼリーによる咀嚼能率検査を行い、口腔関連QOLはGOHAIで評価した。

III 考察および結論: 広範囲顎骨支持型補綴装着前後の口腔機能評価では装着後に咬合力および咀嚼機能の改善が認められた。またGOHAIによる口腔関連QOL評価では機能面および心理社会面においても向上が認められた。広範囲な顎骨切除および再建を要する症例に対し治療の一連として広範囲顎骨支持型補綴を適応することで口腔機能回復と口腔関連QOLの向上に寄与できることが示唆された。(治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表についても患者の同意を得た。倫理審査委員会番号11000374 承認 承認番号 NDUH-RINRI2020-7号)